



新編  
 諸國通志  
 卷一

特  
 2.052  
 15





一 武士の世帯をいぬけあることありのい  
 女房ハチヤチヤ古くはる同利あるん  
 二 孝切の角力もあひい四十八分まんり  
 う門徒もさむいぬけあるこれ目月之  
 三 尾の御術ハけいぬけあるらんらんらん  
 兼もさむいぬけあるらんらんらんらん  
 諸道聴耳世間様 全巻  
 又冊

四 和奇の侍女ハ凡三をいぬけあるらんらん  
 とびあがりいぬけあるらんらんらんらん  
 五 雑物の秘蔵ハあるらんらんらんらん  
 浪華之破落戸和譯大郎著  
 絵入



彼賢人其中間法度もゆめなり  
 美もかきあも。真もさるん虚も  
 けいぬけあるらんらんらんらんらんらん  
 志もさるん美のうらも  
 れりもさるん家もさるん出も人ハ口  
 小かりのたふ。能もさるん翻もさるん尾  
 入り喰つく世の帰成。夫もさるん安燥  
 乃たさるん梨もさるん後ハい

免後海もつた。あち祖乃指さし  
の。は尻わしひの戯色その  
の。今名筆やうた虫魚  
見。を。身。世。間。祖。と。り。あ。り。ハ  
見。後。乃。人。如。伽。と。あ。り。ん。り。

昭和三年

源壽

いぬ乃とー 相得右郎



諸道種身世間猿

一之卷

目録

一回 要害と問ふあは所人の煉廊

先祖の武勇の高れけり  
浪人乃筆盤指も  
二一天化の五百石

二回 貧乏と神とまの守裏信家

一人ひとと多岐いけ物  
と見えやうと百姓り子  
移し出と女房の和神

三回 又盲と昔ぼりれ家飛

我國利して貧乏具を  
心りこちの凌雲乃橋  
浪居の美見と秋の曙の系忌

① 要害と間とあゝ所人の城廓

於此治ま後代の弓矢はつる  
道具屋に穿せたる人  
土まけてるも海いと一僕は  
乃と此の敵の血役いまり  
して御馬のさねで流るる  
一七星檀と風と祈る  
門下と根と搦しての後  
所人の百姓とても武蔵と



晴の大ね先祖の勤みで我々のもござるれ子孫のたふ  
是れも男兵今私語人の牙とて先祖の家業よくは業も出  
来ませぬも眼も足も後足も是れは命た後でござるかと  
いふは三十希けりかぬ却てそれいふは作らぬ家業の  
業程をいふ所の所化しむは又先祖の所化しむは一目  
大國へ行くはれども種ねとすもの勤み及信託して強れりか  
名は一系にゆくはあま軍師疏しよあが居宅と去年建ちしゆと  
があの地えと口説きあされて下こせおれが勤み及の流儀の繩をりて夫  
ざりふ小路通と太きとて一軒もあ店しひりて中とら放し考  
るる為人地帯とつるまふは後横町ハ搦手海城のりぬ物とをひ  
りとうち海板の板とつるりよとて一重なりとそ介産の心算を

も寸毫ごり計略とらる業しとぬはじや人下へんるは  
まて大工百座どもは他とていせぬわ神文とぬきとと理  
がましく罵らる勤みとて一軒とてそれいふは命た後で今日の軍法ハ  
し中申や要害とてあまとすものもあまがぬく業とてい  
の勤みのけり業程のさるは後とらて貴賞とらぬは後とら  
より智恵とてあまとすものもあまがぬく業とてい  
士の山とていふは後とらと十里とらと國地とありて化りのい  
経わづらとすまてハ割がますとてえとのあはれとていふ業とて  
世への後とていふは後とらと向居の軍とていふ業とてい  
と業とていふは後とらと所業とていふは後とらとていふ業とてい  
ぬは後とていふは後とらとていふは後とらとていふ業とてい

他文も一様にお守むるなり。約半紙をすつ者よ心細く人のあや  
政宗一尺五分物に令け付て信がらぬの足元は白状の  
さままを御の擧す内人せぬ事ハ命以て誅し中さぬと  
善く信りしはすれども。後月よりなむをてそえの地見  
祖幼女に左様を卑劣な武士でへあつて。元と思を捕三代の大  
は。嗚呼と嘆して。後ハ。いにも。いり。り。相幼女ハ。善き。ま。ま。  
て。方。の。奈。め。の。男。と。思。は。せ。若。あ。り。て。去。西。國。の。は。家。へ。卒。人。技。術。  
そ。幼。女。方。と。思。て。令。及。人。の。あ。り。付。幼。女。の。日。願。中。日。大。小。立。派。に。依。  
身。と。思。つ。た。小。女。三。希。が。方。案。内。と。て。對。面。し。松。若。善。善。と。武。器。  
上。陣。と。し。て。幼。女。の。面。面。と。い。は。し。た。の。い。く。お。世。は。つ。つ。り。そ。の。い。も。  
先。生。と。い。は。美。令。と。い。く。向。後。所。人。お。集。の。集。術。と。勅。て。去。た。と。幼。女。

なまらしくが。那。要。で。ご。ご。ご。お。ま。ま。い。ま。い。の。面。あ。い。と。い。く。寸。毫。中。あ。い。せ。  
向。し。時。乞。と。せ。け。し。く。と。平。希。異。で。あ。ら。ひ。物。と。い。は。代。大。尺。と。い。く。世。  
と。お。ね。ま。大。名。が。あ。つ。た。の。い。ま。あ。い。を。侍。と。い。く。福。と。い。く。お。り。わ。い。し。も。  
と。の。付。天。晴。の。知。り。で。る。世。と。い。く。お。ま。ま。い。ま。い。と。い。く。お。ま。ま。い。ま。い。  
と。眼。と。い。く。お。ま。ま。い。ま。い。と。い。く。お。ま。ま。い。ま。い。と。い。く。お。ま。ま。い。ま。い。  
と。ま。ま。い。ま。い。と。い。く。お。ま。ま。い。ま。い。と。い。く。お。ま。ま。い。ま。い。と。い。く。お。ま。ま。い。ま。い。  
と。い。ま。ま。い。ま。い。と。い。く。お。ま。ま。い。ま。い。と。い。く。お。ま。ま。い。ま。い。と。い。く。お。ま。ま。い。ま。い。  
と。の。賞。と。い。く。お。ま。ま。い。ま。い。と。い。く。お。ま。ま。い。ま。い。と。い。く。お。ま。ま。い。ま。い。  
と。ら。あ。い。ま。い。と。い。く。お。ま。ま。い。ま。い。と。い。く。お。ま。ま。い。ま。い。と。い。く。お。ま。ま。い。ま。い。  
と。面。目。と。い。く。お。ま。ま。い。ま。い。と。い。く。お。ま。ま。い。ま。い。と。い。く。お。ま。ま。い。ま。い。  
と。あ。い。ま。い。と。い。く。お。ま。ま。い。ま。い。と。い。く。お。ま。ま。い。ま。い。と。い。く。お。ま。ま。い。ま。い。















りた付。そのおんごうふか漬は居る。やむに入書賣するものざら入  
とこの飯粒とをひき守の。そのまもあつらふ。そのの神の依  
合カハ何の程と。聖そのてあつらふ。そのまもあつらふ。そのの神の依  
合も。そのまもあつらふ。そのの神の依。そのまもあつらふ。そのの神の依  
の。そのまもあつらふ。そのの神の依。そのまもあつらふ。そのの神の依  
儀。そのまもあつらふ。そのの神の依。そのまもあつらふ。そのの神の依  
も。そのまもあつらふ。そのの神の依。そのまもあつらふ。そのの神の依  
祇園。そのまもあつらふ。そのの神の依。そのまもあつらふ。そのの神の依  
の。そのまもあつらふ。そのの神の依。そのまもあつらふ。そのの神の依  
際。そのまもあつらふ。そのの神の依。そのまもあつらふ。そのの神の依  
尻。そのまもあつらふ。そのの神の依。そのまもあつらふ。そのの神の依

房史十集あつらふ。そのの神の依。そのまもあつらふ。そのの神の依  
と。そのまもあつらふ。そのの神の依。そのまもあつらふ。そのの神の依  
そのの神の依。そのまもあつらふ。そのの神の依。そのまもあつらふ。そのの神の依  
なる。そのまもあつらふ。そのの神の依。そのまもあつらふ。そのの神の依  
お。そのまもあつらふ。そのの神の依。そのまもあつらふ。そのの神の依  
る。そのまもあつらふ。そのの神の依。そのまもあつらふ。そのの神の依  
あ。そのまもあつらふ。そのの神の依。そのまもあつらふ。そのの神の依  
一。そのまもあつらふ。そのの神の依。そのまもあつらふ。そのの神の依  
神。そのまもあつらふ。そのの神の依。そのまもあつらふ。そのの神の依  
た。そのまもあつらふ。そのの神の依。そのまもあつらふ。そのの神の依  
ら。そのまもあつらふ。そのの神の依。そのまもあつらふ。そのの神の依  
ら。そのまもあつらふ。そのの神の依。そのまもあつらふ。そのの神の依







よりハハの多の男ぞう。如程の老若招来もくわくあ  
くまのまを七十はらたてて隠居の節に法辨と名は文愚  
と改めしむ七三郎いしてたつとゆきて我代きたる都より  
たつ福学は徳也。河海二派の悟強し胆酒を免るより。自然  
と今勝米市場に掛子とやう立て化磨生より信堂の付三  
子常々あつてあしゆねあつて酒つゝの僕思ふ婦が弟とん一ツ  
破りとも唱と叫んで千梅と掛けるとす孝亮はなまらふ  
中戸の密教とすて放来くと漢文よりはり付合が廣高はは  
けてを改より愛志玉所の流也とゆもわう。雲の約来まの夜  
咄と頻に古の地ゆありて生て方室を言とをさされて目  
利がゆのすまは上河辺の書物屋菊亭といふ所は老門口のそ

のねむる掛物第とゆき奉て。且取らるる勢を中まをねげ掛  
物に唐字とてこころゆすげりかゝるはるに及ますは名取のあ  
ゆねとやゆとあすまをねと出して乃すんた。とる一門乃より  
せららあひがちもはやうな古字はあつてあつてあつて  
がふ。そと魏の明帝の築れ。凌雲臺の築也。は掛と築く  
時あやまりて魏の行は付てあふ。多字は書し。章池といふ魏文  
操糖とて約してせせられ。地よりあつての井を文あつて。章池  
と書して白雲とあつてあるが。そ魏のあつてと乃て魏と唐と  
ら唐とやと後とやの。唐等といふ書物屋の事。はた文と書  
くもして。そあつて相とあつてあつて。はた文と書くも  
とつてつりゆし。そと魏とつてあつての。そこのでこころゆす





此連珠の壁も乃方のあがごころのてと瓦礫もはあごころ  
 室所及のほま宝暎むすぶとよ業をてあつ海守かあつらと尺  
 不あつんやうとやうた極でござる中かこつらつとも暎のえ  
 窓でござるも基あうれあつら七毫の物十年の物も満た  
 のたをまふ人衆も是かと地をうらふも七毫は極利  
 の名物方方おえつじやぬと暎の極を守や  
 らふも極むひよ中うもはあつて尺を分る極あつらあつら  
 尺人が一のあつといひ一もはあつらうもはあつらあつら  
 ぞりて暎とやまふ花かこつておまふ方かもむ暎歴く乃  
 たや衆がござるづつむもの国利で求あつらかり衆が極中  
 よいあつらあつらあつら夕の極でいひう目のあつら一人も

尺をせぬ向後と七毫のあつらあつらあつらあつらあつら  
 らつ中かろも極方の衆業とつらわとつらわあつらあつら  
 も一毫の五毫するものなく一毫あつては夜のあつらあつら  
 目かあつらあつらあつらあつらあつらあつらあつらあつら  
 つたあつらあつらあつらあつらあつらあつらあつらあつら  
 よいあつらあつらあつらあつらあつらあつらあつらあつら  
 とつらあつらあつらあつらあつらあつらあつらあつらあつら  
 とつらあつらあつらあつらあつらあつらあつらあつらあつら  
 の暎あつらあつらあつらあつらあつらあつらあつらあつら  
 の衆あつらあつらあつらあつらあつらあつらあつらあつら  
 て国利が暎あつらあつらあつらあつらあつらあつらあつら

仙五

全廣

しぬ。強居大愚いぢりす。強居地をききて。後年一七。その流  
い付。つ。し。つ。利。自。情。より。大。き。に。全。居。は。の。名。の。も。の。り。人。笑  
いて。大。地。の。名。流。し。り。の。り。し。高。人。の。た。り。す。也。た。り。の。り  
いや。町。人。と。き。き。等。と。そ。の。の。り。の。り。と。き。き。あ。り。て。強。業。と。い  
いえ。き。の。利。の。り。と。ま。う。と。強。居。と。り。て。あ。り。つ。け。強。居。へ。え  
いら。も。ね。ぢ。ち。ち。の。強。居。地。の。り。の。り。の。中。也。と。い。や。の。海。と。い  
い胎。心。中。の。り。と。い。強。居。と。い。の。り。の。り。の。り。

一之巻終

全廣

仙五

仙五

馬  
書  
友